

素人の作詞作曲から生まれて
天下の名曲として歌い継がれる

『与作』

昭和歌謡

誕生物語

第1曲目 文・山川智

じーんと来る歌である
山間の清涼な空気を突き破って
響き渡る「トントントン」
その声は山々に響き渡っていく

二人は惚れあい、慕しむ仲だ
食しくども勞わり助け合ひ
日々の活計を灯していく

本作の相手は深山である
神に祈って木に挑み、合掌する
時には箕、粟、桑の恵みをいただく

聞こえてくるのは風にそよぐ葉擦れ
聞こえてくるのは溪流の運る水鳴り
聞こえてくるのは与作の木を打つ音
「カーーン、カーーン」

葉擦き屋根の我が家は指呼の間だ
木枝に腰掛け調息している
女房の機織りの拍子が気搔搔らす
「トントントン、トントントン」

取り巻く世界には一切の不浄はない
畏敬なる自然に寄り添い懸命に生きる
我々はそんな命を受け継ぐ者なのだ

かって、NHKの日曜午
前日舞台に、あなたの
メロディー」という番組があ
った。

同番組は素人が自分で作詞
作曲した作品を譜面で公募、
それをプロの歌手たちが歌っ
てみせて、高木東六らの審査
員が批評し、アンコール曲(優
秀曲)を選ぶ。さらに絞り込ん
で年間コンテストにエントリ
ー、NHKホールで行なう年
間コンテストで、その年の最
優秀作が決定するというもの。

昭和38年(1963)から22年
間も続いた長寿番組だった。

昭和53年(78)、そんな番組
から生まれ大ヒット、サブち
やんの代名詞といわれる持ち
歌になったのが「与作」である。

奥深い山里で暮らす夫婦。
樵の夫を、女房が機を織り葉
を打ちながら助けている。仕
事が終わる夜が更ける。二人
が暮らすのは築き屋根の小

さな家だ。空には満天の星が
輝いている。

そして朝になれば、再び山
の仕事が待っている。そんな
日々の繰り返しなかで、夫
婦は、山の精気のもとに還元
されていくのだ。

つまり、樵である与作の何
気ない日常は、我々日本人が
歩んできた人生観や宗教感そ
のものであり、この詞には、自
然と共生して生きる、そんな
日本人の心が、哀しいほど
まよく表現されていた。

思うに与作とは山の神なの
かもしれないなあ、改めて「与
作」を聴き、ふとそんなことを
思った。

さらに、この曲で多用され
るのが「ハイハイホー」と「ト
ントントン」という、あの間の
手。一見、シンブルではある
ものの、そこには言葉では言
い表すことができない、情と
深さを持たせている。いや

あり、見事である。

昭和53年といえはキャンデ
ィーズが解散、さらにピンク
レディー全盛期の頃だ。

この年、年末の紅白で紅組
のトリを飾ったのは百恵ちや
んの「プレイバックParty
II」だった。

一方、サブちゃんは「与作」
で、自身が16回目となる紅白
のトリを務め、なんと翌年の
紅白でも「与作」を熱唱。

サブちゃんにとっても「与
作」は、ひととき思い入れの強
い持ち歌になった、というわ
けだ。

ちなみに、「与作」は、千昌夫
もサブちゃんと同時期にリリ
ースしているが、サブちゃん
は某歌番組のインタビュイー
で「千くんや五木くんも歌って
いますけどね、彼らのは「与作
ではなく「賦作」でした」と冗
談とも本音ともつかないコメ
ントして、司会者を凍り付か

せたというエピソードも残っ
ている。

北海道知内町で網元の家に
生まれ、歌手を夢見て上京、ギ
ター片手に苦勞の末デビュー
したサブちゃん。以来、数々の
作品で男の激情を歌い上げて
きた彼が、その路線に新境地
を開くことに成功した曲、そ
れが「与作」だったのである。■

1962年東京生まれ、テレビ朝日
制作局を経てフリーランスに。
著書に『東方神起の謎』『東方神起
J-POPを歩く』『共にイーストプレス』、
『ビューティフルディメンションを
つなぐ』など。
また、出版プロデュース作品として
『生きる 運命の糸』『スターアップル』、
『アキの社』、『狂食キヤル』(共にイースト
プレス)などを執筆。

Yamakawa Gai



1962年東京生まれ、テレビ朝日
制作局を経てフリーランスに。
著書に『東方神起の謎』『東方神起
J-POPを歩く』『共にイーストプレス』、
『ビューティフルディメンションを
つなぐ』など。
また、出版プロデュース作品として
『生きる 運命の糸』『スターアップル』、
『アキの社』、『狂食キヤル』(共にイースト
プレス)などを執筆。